

# イモを 見分ける

## タロイモづくりは男の仕事

現地調査も何度目かになったフィジーのワイレブ村。私がタロイモのことを知っていたが、聞いて、男性たちがサンプルを家までもってきてくれることになった。

フィジーでは伝統的に男性と女性の役割分担がはっきりしている。畑仕事は男性の仕事で、タロイモの耕作もやはり。女性は近場の畑へ出かけるが目的。せいぜい下草刈りくらいで、男性のようにはイモの苗を植え付けたり、逆にひっこぬいて収穫したり、というような仕事はしない。加えて公の場では夫婦でも男女一緒に歩かないという土地柄、日本から来た女性客を男性陣のなかに放りこみ何キロも離れたタロイモ畑まで歩かせるなんてとんでもない。というわけで、今回は自分の足は使わないお姫様のフィールドワークになってしまった。

それにしても、でてるわ、でてるわ、次から次へともちこまれる、ゼーんぶ違う種類だというタロイモ（私には全部同じに見えるけど……）。

家の前に順に並べて、葉全体、葉柄、そして全体図、と写真に取め、ノートに名前とそれぞれの特徴を言われるままに書きこむ。女性たちは男性ほどタロイモのことを知らないらしく、私のノートをのぞきこんでは「えっ、それもタロイモの名前なの」などと、感心することしきり。

それにしても畑も見ずにタロイモ調査なんて。そこで言ってみた。「あー、実際に生えているところを見た方がよくわかるんですけど」。ああそうか、とにこり笑った村のおじさん、タロイモ・サンプルを花束のように束ねてもらい、そのままじっと待っていてくれる。確かにさういうふうに見えるよね。でもちょっと違うんだけどなあ。長旅の末に到着したタロイモは、こうして立てるとしなびてくったりしているのが一段とあからさま。仕方がない、おじさんに謝意を示すた



菊澤 律子 (さくさわ りつこ)  
先端人類科学研究部

## 男女で異なるタロイモの分類

現地調査では、いろいろなタロイモがどんな風に分類されているかを知ることが大切だ。分類の仕方はいくつかあり、男性と女性で多少違う。女性はオーソドックスな「真タロ」、古い「古タロ」、そして「新しいタロ」の三種。農業試験場から最近導入されたものはもちろん全部、新しいタロだ。男性の方はこの分類とは別に、タロイモの形状に基づいた分類も使うという。「長いタロ」と「ヤツガシラ・タロ」。「長いタロは、親イモが大きくて長く、そのまわりにコイモがたくさんつく。ヤツガシラ・タロは、親イモの一部がほとんど分岐して太っていくんだ。形を見たら違いは明らかだよ、もちろん収穫の仕方も違うんだけどね」。

## タロイモ

(学名: *Colocasia esculenta*)

サトイモ、サトイモ科。日本の「サトイモ」と同種。太平洋の多くの地域で主要栽培植物のひとつとなっており、さまざまな変種がみられるが、近年では特に早生種などの品種改良もさかんである。原産地はインドで、マレー半島などを経て太平洋全域に広がったと考えられている。

ところが普段タロイモと馴染みのない生活を



並べれば違いがわかるかな?



水田での量産栽培もある。整備が終われば植え付けがはじまったころのタロイモ水田の風景



「長いタロ」のはずが?? 親イモ(下の細く突き出ている部分)の上に2つ、新しいイモが育っている



ヤツガシラ・タイプのタロは、太い葉柄(写真上側)とまわりに育つ新芽の間に足をいれてひっぱると、育ったタロだけが収穫でき新芽はそのままだ中に残る



村の近くの畑には女性もよく下草刈りや食材集めにでかける。タロイモの葉は現地では大切な野菜のひとつ



食糧にのったゆでたタロイモ。主食なので、ごはん同様、味付けはしない



畑からタロイモを持ち帰ってきた村のおじさん。ここではタロイモ耕作は男性の仕事

つても、この分け方がよく理解できない。業を煮やした男性の一人がとうとう、さらなる見本をとりて走ってくれた。そして、ほらね、と手渡されたタロイモは確か、長いタロのはずだけど……。「ちょっと待って。これって違うみたい」。

そんなことあるものか、と言いながらあらためて運びこまれたサンプルを見た現地の男性たちもびびくり。いわれてみたら確かに形は「ヤツガシラ・タロ」だ。でも収穫の仕方は「長いタロ」だよ。

男性側の分類がその後一部修正されることになったのかどうか、それ以来ワイレブ村にもどっていない私には残念ながらわからない。